

ピアノソナタ第8番 ハ短調 Op.13 『悲愴』

1798年ごろ作曲。『悲愴』という副題は初版の楽譜に記されており、ベートーヴェンの了解のもとでこの題が付けられたことは間違いありません。彼自身が副題を与えることは珍しく、ピアノソナタではこの作品と『告别』の2曲しかありません。第1楽章に序奏があることや第3楽章のロンド形式の書法から、ベートーヴェンはこの作品を交響曲や協奏曲のような大規模な作品に近づける意思があったのではないかと感じます。初期にカテゴライズされるこの作品はまだまだハイドンやモーツァルトの影響を受けた古典的な作風でありながらもベートーヴェンが自らの感情を音楽に落とし込もうとする意思が感じられ、中期以降の作品にはないベートーヴェンの若々しい表情がよく表れています。

ピアノソナタ第23番 ヘ短調 Op.57 『熱情』

1804-5年作曲。『ワルトシュタイン』『告别』と並んでベートーヴェン中期を代表するピアノ作品のひとつです。ベートーヴェンのピアノ作品には往々にして後の交響曲に繋がるモチーフが見られるのですが、このソナタには『運命』の有名なモチーフが第1楽章の主要テーマとして現れています。また、同時期に作曲していた作品としてはベートーヴェン唯一の完成されたオペラ『フィデリオ』があり、このことはピアノという楽器の特性にとらわれずに音楽そのものに主眼を置いて作曲できる環境であったことが分かります。静と動の強烈な対比による緊張感がこの作品の大きな特徴であり、難聴という大きな障害に立ち向かい運命そのものに対峙しようとするベートーヴェンの精神そのものが感じられます。